

企画者のことば

産婦人科手術の進化は目覚ましいものがあり、特に腹腔鏡・子宮鏡やロボット支援手術の普及により急速に低侵襲化されつつある。低侵襲性手術は良性疾患、異所性妊娠はもちろんのこと、子宮悪性腫瘍に対しても保険適用となり、短期間で飛躍的進歩を遂げた。しかしながら、初心者にとっては間接視下、遠隔操作、限定された操作空間といった不利な点もあり、安全性が失われたり合併症を増やしては本末転倒である。また、2018年3月にニューオーリンズで開催されたアメリカ婦人科腫瘍学会（Society of Gynecologic Oncology；SGO）において Phase III Randomized Trial of Laparoscopic or Robotic vs. Abdominal Radical Hysterectomy in Patients with Early-Stage Cervical Cancer：LACC Trial. と Comparative Effectiveness of Minimally-Invasive Surgery in Women with Early-Stage Cervical Cancer が報告され、早期子宮頸癌に対する広汎子宮全摘術に関して、低侵襲アプローチは開腹アプローチに劣るという衝撃的な内容であった。日本での検証が必要であるが、悪性疾患に対する低侵襲手術は開腹手術を十分に再現でき、低侵襲性特有の腫瘍細胞の播種を予防することが重要である。

産科領域においても先人らの伝統的技術をさらに時代にマッチした工夫がなされており、前置癒着胎盤や後産期出血に対する対策法も進化している。また、胎児治療も進化の一途をたどり、双胎間輸血症候群（twin to twin transfusion syndrome；TTTS）に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術も導入されている。前述したように、悪性手術に関しても低侵襲性手術が導入されているが、進行卵巣癌手術の目標は最大限の腫瘍減量 maximum debulking を行うことである。さらにはがん生殖といった新しい分野が発展しており、妊孕性温存を目的とした卵巣摘出術、卵巣組織移植術も注目を集めている。また子宮移植により出産例の報告も蓄積されつつある。

産婦人科手術は幅広くそして奥深く発展しており、アップデートな情報や技術を習得し、より安全で完璧な手術を目指さなければならない。本企画ではそれぞれの分野のエキスパートの先生方による手技の実際と留意すべきポイント、そしてアップデートで貴重な情報について執筆していただいた。バッチリ完璧な（On fleek）手術を目指す読者の皆様に役立つ企画となれば幸いである。

岡本愛光（東京慈恵会医科大学）
